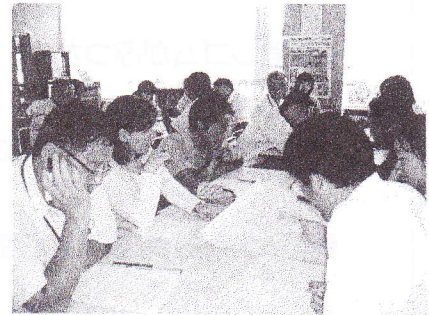


## 職員研修を行いました

9月28日に、宇都宮市教育センターの半田文男先生を招いて、特別支援教育についての職員研修を行いました。

学年の枠を越えてグループを作り、事例に挙げた子どもについての話し合いが行われ、グループごとに様々な視点からの支援方法が発表されました。発表の中には、『周りにいる子ども達も育てていく必要もある』という意見や、『子どもの良いところを伸ばし、褒めて認めることを心がけたい』という発表もありました。そして、『保護者の方との協力を大切にしたい』という意見が多く聞かれました。

半田先生からの講話の中にあつた、『子どもを見つめる目』を大切にして、職員が一丸となって取り組んでいきたいと思ひます。



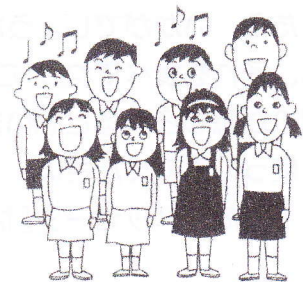
## 人それぞれの『感覚』

前号では『発達障害』について説明をいたしました。今回は、それに関連して『感覚』について取り上げてみようと思ひます。

みなさんには、それぞれに好みの香りや色、場所、音などがあると思ひます。反対に、好まないものもあるかと思ひます。これは、広い意味で『感覚』と言われてはいますが、人によって感じ方は様々ですね。

でも、一般の人にはなんでもないことでも、とても強い不安感や嫌悪感を示す人も中にはいるのです。これを『感覚過敏』といひます。例えば、人に突然触られることが耐えられないことや、粘土や砂遊びができないなども、感覚過敏の中の一つである触覚過敏というものです。このような特性を、本人も周りにはいる人たちも理解しながら付き合っていけると、相手のことを考えた言動をとることができ、さらには『自分』についても考えられる人になっていくのではないでしようか。

裏面に、感覚過敏についての例がありますのでご覧ください。



### 感覚過敏の例



五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）に過敏さを持っていること

- 消しゴムがぶつかり、針でつつかれたように痛く感じる。・・・触覚過敏
- 周りの人はあまり気にしない音や特定の音を聞くと、耳をふさぐ。・・・聴覚過敏
- 粘土を触ったり、泥遊びをしたりすることが苦手。・・・触覚過敏

上の3つは例です。その他にも、30cmの高さが1mくらいに感じる方や、人の視線がとても気になる方など、私たちが「普通なら大丈夫……」と思うことでも、過敏さを持つ方にとってはつらいこともあります。

周りの方々の理解で軽減されることもありますので、温かく見守ることも必要です。

ちょこっと ブレイクタイム

中学生と親の関係

その2



思春期の中にある中学生を持つ親御さんの中には、わが子に対して複雑な気持ちを抱いている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。子どもが言い放った言葉に、立腹し、つつい頭ごなしに言い返してしまう……。その後、言い過ぎてしまったなあと反省するという悪循環。

このような経験のある方に、『わたしメッセージ』をお勧めします。

『わたしメッセージ』とは、『わたし』はこう考える、という言い方で、親の言いたいことを子どもに伝えようとするものです。例えば、子どもが、「おなかすいたよ。」と言ってきたときに、「うるさいなあ。お菓子があるから自分で食べてよ。」と親が返事をしてしまうと、『わたしメッセージ』は伝わりません。このような返事をされた子どもも、いい気持ちはしないでしょう。こんな返事だったら、いかがでしょうか。『お母さんは今から出掛けなくてはならないの。戸棚にお菓子があるから、それを食べてね。』この言葉には、お母さん（わたし）の考えと子どもの自尊心を傷つけない心配りが感じられると思います。言葉のキャッチボールって、大切ですね。ぜひ、『わたしメッセージ』を使ってみてください。

『わたしメッセージ』は、T. ゴードンが「親業」の中で提唱したコミュニケーションの方法です。